

## 別紙 2

### 論文審査報告の結果の要旨

論文提出者氏名 姜 相圭 (カン サンギョ)

論文題目 「朝鮮の儒教的政治地形と文明史的転換期の危機  
転形期の君主高宗を中心に」

朝鮮は基本的には新儒教に基づいて成立した独特の政治構造を有していた。本論文はこうした構造を朝鮮の儒教的政治地形と名づけ、朝鮮における王権の位相と君臣関係の歴史的展開を視野においたうえで、いわゆる西欧の衝撃に対する君主高宗の対応を分析し、朝鮮における「伝統秩序内部での革新」の過程を再検討したものである。それはまた、君主高宗がいかなる危機意識と政治構想を持ち国内外の政治勢力と向き合ったのかを検討することで、朝鮮における中華思想の変容と万国公法に基づく国家平等観念がいかに醸されたのか、またそのことと高宗による大韓帝国の宣布と主権守護外交の展開はいかなる関連を持っていたのか、という一連の問題を考察する新たな試みともなっている。

「序章 近代知としての転換期東アジア像と朝鮮近代史理解」は、既存研究の検討と本論文の方法を論じている。1960年代以降輩出した民族主義史観や内在的發展史観が、ともすれば、<伝統 vs. 近代>、<支配階級 vs. 民衆勢力>、<守旧派 vs. 開化派> という単純な二項対立図式に陥る傾向があったことの問題性を指摘しつつ、著者はポール・コーエンの中国史学史に関する議論を援用し、東アジアにおける西欧の衝撃への対応が「伝統秩序内部での革新」という性向を有していることを確認する。また同時に、既存研究が在野の開化運動や反帝国主義運動に関心を集中させることで、ともすれば王室を含めた朝鮮政府の諸政策と政策決定過程の分析を欠いてきたことを指摘し、君主高宗の思想と行動に焦点をあてることの意義が説かれている。

「第一章 朝鮮の儒教的地形と君臣関係：誕生と展開」は、14世紀末の朝鮮建国にまで遡ったうえで、朝鮮の儒教的政治地形が形成されていく経緯を、4つの時期区分を行いながら、各々の時期における特質を論じている。ここでは、儒教的思惟体系に内在した普遍的理念に王権がいかなる意味で制約を受けたか、またそれらが、議政府体制、台諫制度、史官制度、経筵制度、上疏制度などによりどのように制度化されたかを論じつつ、それぞれの局面で王権の政治的位相にどのような変化が現れたかを検討している。そして「相互依存的緊張関係」とも呼ぶべき君臣関係と「牽制と均衡」を主たる特徴とする朝鮮の儒教的政治地形がさまざまな不協和音を奏でながらも、持続していったことが指摘される。

「第二章 東アジア秩序の動揺と各国の危機意識と相違」では、19世紀の西欧の衝撃に

さらされた清・日本・朝鮮の対応の相違が検討される。著者はまず、中華秩序と近代国際秩序の交錯を清と日本の万国公法受容に則して比較検討し、中華秩序の変容と「朝鮮問題」が台頭する政治的・思想的背景を描き出す。そのうえで、著者は再度朝鮮に目を転じ、著者のいう19世紀以降の第4期における朝鮮政治の特徴を概観し、高宗の王位継承以後「事実上の摂政」まで上ったとされる大院君の政治指導を論じ、大院君が内部的に強力な改革政策を推進しながらも、対外危機に際しては、「排外・斥和論」に基づいた危機管理を断行するに至った経緯を分析している。著者はここで、大院君がフランス宣教師と接触しようと意図していた事例をとりあげながら、西教に慣れていた大院君が排外政策に急旋回した理由を、単なる頑迷な鎖国主義にではなく、寧ろ大院君の徹底的な政治的現実主義に求めている。

「第三章 転形期君主の政治意識と新しい秩序をめぐる模索と葛藤」では、君主高宗の政治意識と対外観が形成されていく過程が、王位継承後に経筵の場で行われた帝王学学習と高宗が有していた対外的情報源の双方から検証される。これを受けて、さらに著者は、対内的には高宗が、政治的求心力確保のために統理衙門など新たな政治機構を設置していくとともに、対外的には、清との関係を万国公法秩序によって再整備し、朝鮮に好意的と見なされていたアメリカとの条約締結を契機に、朝鮮が万国公法秩序に参加し、「均整」の原理の下に朝鮮の「自主権」が保障される構想を高宗が抱いていたことを論じている。そのうえで、このような構想の実現を制約した内外の要因に、著者は照明をあてている

「第四章 大韓帝国の宣布と転形期君主の政治的選択」では、国家存亡の危機に直面した高宗が、大韓帝国を宣布し皇帝に就任し、いわゆる光武改革を推進する思想的背景を扱っている。著者は、この時期高宗が唱えた「旧本新参」論を、従来の「東道西器」論と比較検討し、「朝鮮の伝統を踏まえた主体的な視角」と改革・進歩の結合の必要性を高宗が痛感していたことを指摘する。そのうえで著者は、このような伝統的権威の保持者としての王権と万国公法的標準に基づく君主国家の樹立という構想が、大韓帝国の宣布と大韓帝国国制の制定においてどのように具現化されたかを明らかにする。そして日露戦争前後における高宗の主権守護外交の展開を中心に、高宗の施政の最終局面を扱っている。

「終章 パラダイムの転換と転形期君主の高宗」では、本論のこれまでの叙述を踏まえたうえで、改めて、従来の「守旧勢力」対「改革勢力」という単純な二項対立図式に基づく歴史叙述の問題性が指摘され、「朝鮮自身に即して」朝鮮政治史を理解することの重要性と、高宗研究の意義が再説されている。

以上が提出論文の要旨であるが、本論文は次のような点で評価することができる。第一に、本論文は、君主高宗に関する既存研究のうち最も本格的な研究である。高宗に関する研究は、例えば大院君のそれと比べて朝鮮政治史の空白領域をなしており、1990年代に入りようやく研究が本格的に開始された状況にすぎない。このような研究史から見たとき、広範な史料蒐集に基づき高宗の思想と行動を一貫した問題意識から体系的に分析した本研

究は、ともすれば個々の断片的事件史の文脈で高宗に触れるにとどまっていた従来の研究水準を大きく引き上げるものであると評価することができる。

第二に、こうした高宗の再評価が、単なる高宗個人の再評価ではなく、東アジアにおける万国公法受容や朝鮮における王権の性格といった巨視的文脈に位置づけられている点は、本論文の視野の広さを示している。従って、本論文は朝鮮政治史の文脈のみならず、いわゆる西欧の衝撃をめぐる東アジア国際関係史のさまざまな基本問題を、高宗の事例を通して再検討する手がかりをも提示している。論文題目が「文明史的転換期」と掲げる所以は、そこにあるといえよう。

第三に、従来ともすれば、〈守旧派 vs. 開化派〉といった単純な二元論的構図で捉えがちであった政治勢力の配置構図を、伝統と近代が複雑に絡み合う同時代の思惟構造から整理しなおす視座を提示した点があげられる。高宗をとりまく諸政治勢力の位置づけについても、本論文は随所に新しい解釈を提示している。政治過程のダイナミズムを、その背景にある政治理念の位相を踏まえて論ずる著者の姿勢は、積極的に評価できる。

しかしながら、本論文にもいくつかの弱点が無いわけではない。第一に、朝鮮における君臣関係を 4 期に分けて巨視的に分析した第一章は、序論としては意欲的な試みではあるが、第二章以下の本論との論理連関がやや不分明な印象が残る感は否めない。これは、本論の中心をなす対象が高宗の万国公法受容にあり、高宗の国制像の検討が副次的位置におかれている本論文の構成と無関係ではないであろう。第一章で論じた朝鮮における君臣関係の位相を本論部分により有機的に組み込むには、高宗の国制像の特質やその時期的推移に関するより分析的な検討が必要であるように思われる。

第二に、従来の〈守旧派 vs. 開化派〉といった単純な二元論的構図に基づく朝鮮政治史理解に対して本論文は新たな解釈を提示するものであるが、高宗とそれをとりまく諸勢力との関係については、本論文の分析範囲にとどまらない、より微視的な考察が可能であろう。こうした考察のなかに、先に触れたような高宗の国制像や立憲制理解を書き込んでいけば、著者の立論はより陰影の富んだものになりえたであろう。

しかしながら、これらの点は本論文の学術的価値をいささかも損なうものではない。総じて、本論文は、従来研究史上の空白をなしていた君主高宗の思想と行動を体系的に解明した研究として、学界に対して多大な貢献をしたものと認めることができる。以上の点から、本論文の提出者は、博士（学術）の学位を授与されるのにふさわしいと判断する。